

北海道における津波に関するアイヌの口碑伝説と記録

北海道立地質研究所* 高清水 康博

Ainu oral traditions and historical records on tsunami in Hokkaido Prefecture, Japan

Yasuhiro TAKASHIMIZU

Department of Environmental Geology, Geological Survey of Hokkaido

Kita19 Nishi12, Kita-ku Sapporo, 060-0819 Japan

In this paper, Ainu oral traditions and historical records on the tsunami events in Ainu Period were investigated, and the reliability of occurrence of the past tsunami event happened in Hokkaido Prefecture was examined. As a result of investigation, 40 oral traditions and historical records were collected from Ainu literatures. From the examination, I interpreted 20 traditions and records as results of ancient tsunami, and the others were not related to tsunami. The inferred areas attacked by tsunami were distributed around the Pacific coast of Hokkaido.

キーワード: アイヌ, 津波, 北海道

Key words: Ainu, tsunami, Hokkaido, oral tradition, historical record

§1. はじめに

北海道立地質研究所では、平成14～15年度にかけて、北海道での津波堆積物の調査の空白域(おもにオホーツク海岸と日高～胆振海岸)において、これらの堆積物の有無を確認することを目的とした調査を行った。この結果、苫小牧市～鷓川町にかけての海岸付近から津波によると考えられるイベント堆積物が見つかっている(嵯峨山ほか, 2003; 高清水ほか, 2002)。これらの堆積物は有珠b火山灰層(1663年)のほぼ直下の層準にあることから、17世紀に発生した津波イベントによるものと考えられた。17世紀には、道内各地で津波によると考えられる堆積物が見つかっている(七山ほか, 2002; 平川ほか, 2003など)。

そこで、この時代の北海道における津波による災害履歴の記録を収集するため、津波に関するアイヌの記録の文献調査を行った。

§2. 研究方法

紀元前より続く縄文文化の時代の後、北海道では本州とは異なる独自の文化の時代が始まった。すなわち、続縄文文化の時代、擦文文化の時代(オホーツク海側ではオホーツク文化の時代)、そしてアイヌ文化の時代である。ここで、議論するアイヌ時代(約11～19(?)世紀: 田端ほか, 2000)になると、本州との交易が盛んになり、土器は姿を消し、住居の建て方も竪穴式から平地に柱を埋める様式に変わってい

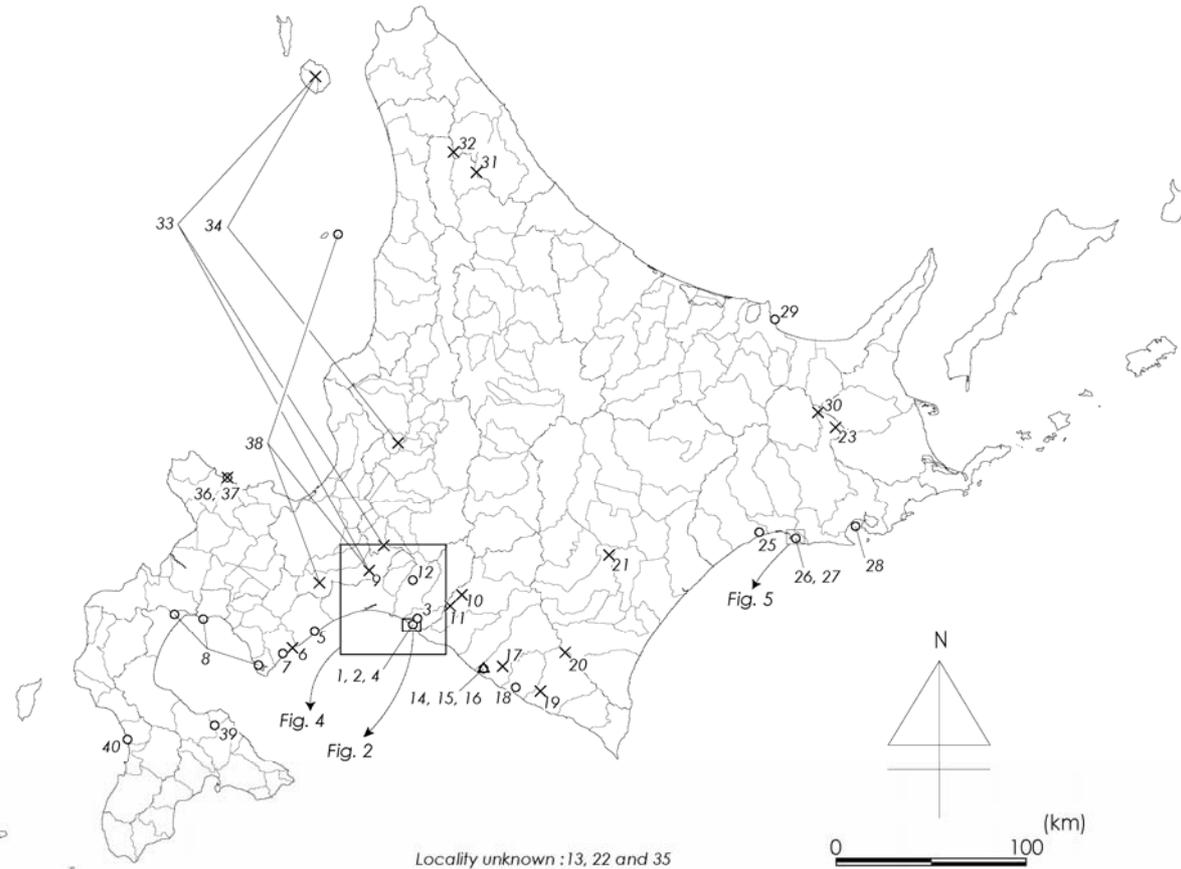
たといわれている。また、アイヌの人々は文字を持たなかったため、正確な歴史を知ろうとすれば、数少ない和人による記録(松前藩の記録や和人による蝦夷地探検の記録など)に頼ることが普通である。しかしながら、アイヌの人々は口碑伝説という形で各地に様々な言い伝えを残している。これらの中には、自然災害について語っているものも少なくない。とりわけ、20世紀の初めにアイヌの古老らから多くの口碑伝説の収集が行われており、本報告ではそれらの史料や文献から、北海道における津波に関する記録を収集した。

アイヌの口碑伝説の引用にあたっては、できる限り米田(1995)のまとめに従うこととした。米田(1995)は、アイヌの伝承利用にあたっては、以下のようなまとめをした上で、関連した諸科学を取り入れシステムティックな研究が必要とした。すなわち、

- 資料としての位置づけには慎重さが要求され、歴史的事実を結びつけるためには緻密な検証作業が不可欠である。
- できるだけ一次資料としてのアイヌ語原文に立ち戻る。それが不可能な場合、その日本語の訳文が原文に対してどのように立脚し、どの程度の距離を持つものか把握する。
- 一地域一個人の伝承をアイヌ社会全体に容易に一般化すべきではない。

である。本論では残念ながらアイヌ語原文に当たることはできなかった。そこで、できる限りアイヌ語の聞き

*〒060-0819 札幌市北区北19条西21丁目



第1図 北海道における津波に関するアイヌの伝説のある場所。○:標高5m, 海岸からの距離15kmまでの地域に津波が襲った可能性あり話が成り立つもの, △:一部可能性あり, ×:可能性なし。図中の数字は, 第3章および, 第1表に対応する。

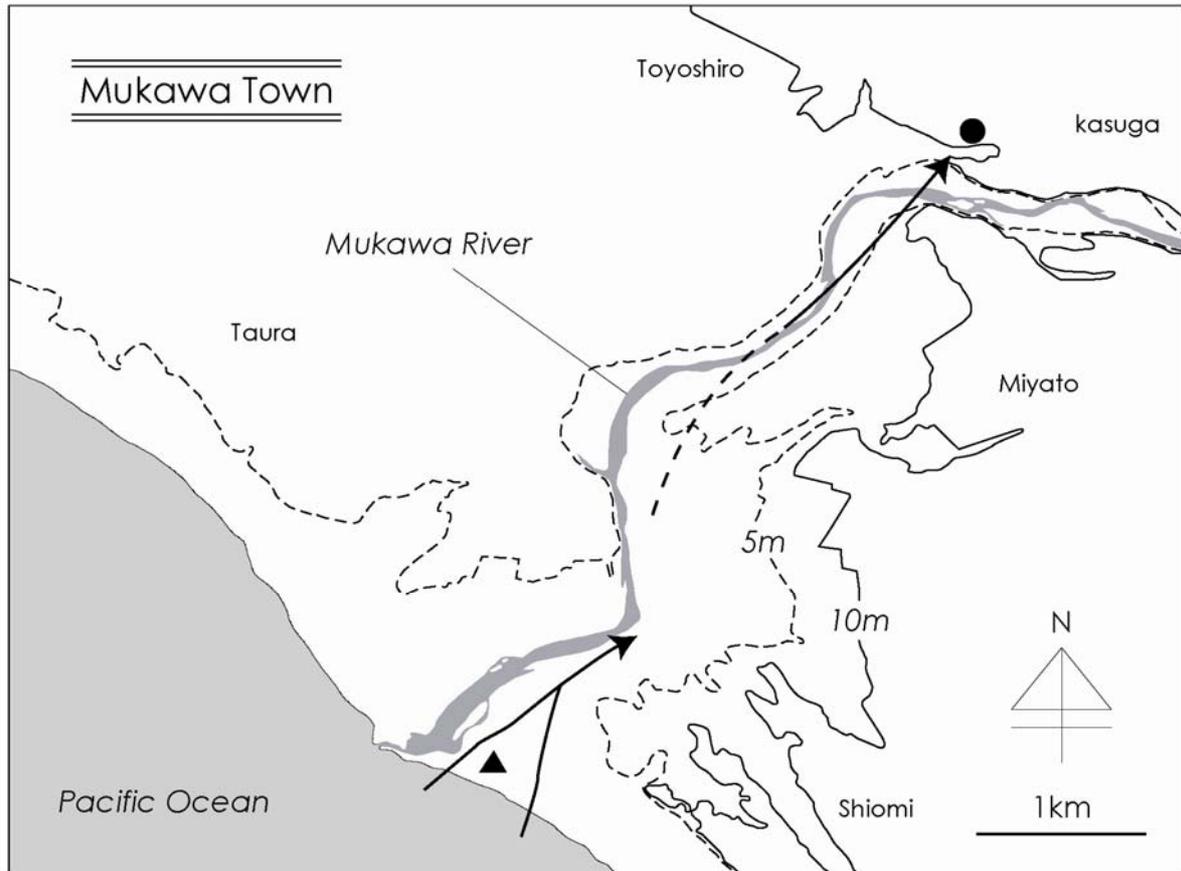
Fig.1 Locality map of the Ainu records on tsunami event in Hokkaido. ○:Places where were related to ancient tsunami. △:Places where were partly related to ancient tsunami. ×:Places where were not related to ancient tsunami. Numbers in this figure are corresponded to chapter 3 and table 1.

取りを行った人物が記載した資料(二次資料)にあたることとした。資料の中に口碑伝説をどこの誰から収集したのかが, 分かるものについては, できる限り明示した。また, 本論で最も重要であることは, 「過去に津波に襲われた可能性がアイヌの口碑伝説や記録に残されていたかどうか」であるので, 口碑伝説自身の内容が事実かどうかを検証するものではない。

次に, これらの記録の中から, 口碑伝説の収集された地域を, 仮に津波が襲ったとした場合に, 地形的に津波に関する記録の内容が成り立つかどうかを評価した。評価にあたっては, 以下に挙げるアイヌの時代における津波堆積物の分布に関する報告を利用した。

七山ほか(2000)は, 13世紀と17世紀に北海道浜中町の霧多布湿原と根室市の友知湾海岸を襲った津波による堆積物の分布を検討し, 17世紀の津波堆積物の分布は現在の汀線から3.257kmに及び, 13世

紀の津波堆積物の分布は, 17世紀の分布より広範囲であるとした。平川(2005)は, 17世紀に北海道の十勝海岸を襲った津波による堆積物の分布を検討し, 津波の波高は, 10~15mを越え, 遡上距離は最大で5kmに達するとした。添田ほか(2004)は, 10~17世紀に北海道東部の厚岸町の史跡国泰寺および汐見川低地を襲った津波による堆積物の分布を検討し, 津波の遡上高は, 5.5m以上, 遡上距離は2.62km以上であるとした。本報告では, これらの結果の示す最大の値を用いることとした。すなわち, アイヌ記録の中で津波に襲われたと推定される地域が, 現在の海拔標高で15m以下, 海岸からの距離が数5km以下をその可能性のある場所とした。ただし, 津波の遡上ルートが詳細に記録されているものに関しては, 標高15mを越えたものでも信頼性が高いとし, 過去に津波に襲われた地域である可能性があるとした(後述の3.26と27)。



第2図 鵜川町における口碑伝説に登場する場所. 海拔5mと10mの等高線を示した. ▲:ムレトイ(ムリエトへ)の丘, ●:オマンルパロ. 矢印は推定された津波の遡上ルート.

Fig. 2. Locations of the Aizu oral traditions in Mukawa Town, and contour lines of 5 and 10 meters are shown in this figure. ▲: “Muretoi” (“Murietohe”) hill. ●: “Omán-ru-paro”. Arrows show the routes of tsunami run-up estimated from Aizu oral traditions.

また、引用にあたっては原文に忠実に従ったが、印刷の都合上変換できない漢字は筆者が容易な漢字に変換した。

§3. アイヌの口碑伝説と記録

以下に述べる各節において、これらの口碑伝説と記録を引用し、津波イベントの可能性を評価する。各節の表題は、これらの記録の表題をそのまま使用した。

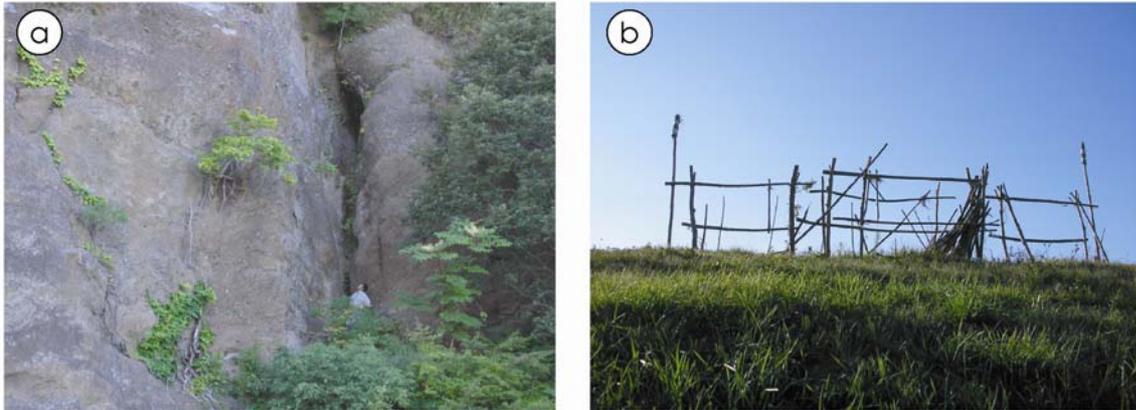
3.1 『シシャモカムイノミの儀式』

この口碑伝説は犬飼(1941)によって記録された。

「シシャモカムイノミをなすムリエトへの丘は鵜川地方の云ひ傳へによると昔この地方に大海瀟があつた時迷ひ狂つたアイヌは一匹の狐に導かれるまゝにこの丘に来たら果して狐は土地の事情をよく知つてみて、この丘丈が水の中に島の如く浮び、鵜川全體のアイヌが救かつたと云ふことで、この丘を守る神はムリ

エカムイで現在ではこの傳説により稻荷の祠が建てられてゐる。」

鵜川地方で行われるシシャモカムイノミは、シシャモが漁獲される前に、川に入るか入らぬか判らない不安な状態においてアイヌ達が村の守り神、海の神、川の神、河口の神をお願いして、多く入ってくるように祈願する祭事である(犬飼, 1941)。このシシャモカムイノミは、シシャモの遡上する河口近くの小高い丘(砂丘)の上で行われていた。しかしながら、アイヌの時代よりシシャモカムイノミの行われていたムレトイの丘(ここでは“ムリエトへの丘”と記述されているが同義;第2図の▲印)は、1992年、浜砂採取のため全て削り取られてしまった(苫小牧民報, 1992)。そのため、現在では正確な位置や地形の様子は明らかでないが、苫小牧民報(1992)によれば、“高さ3mほどの小高い砂山”であつたと記述されているので、海拔標高でいえばそれよりも数m高い標高であつたはずである。この口碑伝説に従うとすれば、このムレトイの丘(砂



第3図 (a) 鵜川沿いの崖にあるオマンルパロの遺跡(第2図の●). 過去の津波と富内線の鉄道工事のために元々の洞窟のほとんどは崩されてしまったという. (b) 現在のムレトイの丘にあるシシャモカムイノミのための祭壇(第2図の▲). 祭壇はイナウによって作られている. アイヌ時代のムレトイの丘は, 1992に行われた砂利採取のために現在はない.

Fig. 3. (a) The remain of “Omán-ru-paro” crops out at the cliff along the Mukawa River (Fig. 2: ●). The original cave of this remain were broken down by the railroad construction and ancient tsunami. (b) The altar on the present “Muretoi” hill is located close to the mouth of the Mukawa River (Fig. 2: ▲). This altar is composed of many “Inau”, that is hardwood stick of Ainu. The original hill was lost by the sand extraction on 1992.

丘)の周りは津波を被ったが,ここだけは波を被らなかったということがわかる。したがって,この周辺の地域が津波に襲われた可能性はあるだろう。

3.2『鵜川周辺のアイヌ文化』

この口碑伝説は更科(1968)によって記録された。

「シシャモ漁の時期が近付くと,川岸に漁小屋(イヌン・チセ)を作り,遡上の十日程前に河口のムレトイの岡に祭壇を設けて,火の神,川の神に豊漁を祈願する。もとはムレトイではなくてルイサンに祭壇があったのだが,津波があったときにムレトイだけが波を被らなかったのだから古者がそこに行ってみると黒狐が守っていたのでそこに祭壇を移したという。ムレトイの砂丘に集まった人々はそこに爐を作って火を焚き,爐の東側に祭壇をたてる。」

前項(2.1)で述べた犬飼(1941)の「シシャモカムイノミの儀式」とほぼ同じ内容で,津波に襲われたときにムレトイの丘だけは波を被らなかったというものである。またこちらの口碑伝説では,シシャモカムイノミを行っていた祭壇は,元来ルイサンというところにあったのだが,ムレトイだけ波を被らなかったのだから祭壇を移したとの記述があった。しかしながら,このルイサンというのが現在のどこのことなのか,今回の調査では明らかにならなかった。

3.3『鵜川の洞窟』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「富内線が鵜川駅から分かれて間もなくウコトイというところがある。昔は山つづきであつたが,あるとき大津波で山が切れてしまったので,そのときこゝにあった大きな部落が流されて全滅してしまったという。

このウコトイに,むかし洞窟があつたが鉄道工事のためにくずされて,今は僅かにその痕跡を止めるに過ぎないが,昔はこの洞窟の附近に時々人の姿が見えるので近よつてみると,いつのまにか消えてしまうというので,あの世に通じる穴だといわれていた。(後略)」

ウコトイという場所は,現在の鵜川町豊城と春日の辺りのことである(鵜川町吉村フユコさんより筆者が収集)。この中に出てくる洞窟の遺跡は,現在でも鵜川の右岸沿いの崖にある(第2図の●印)。この洞窟は,アイヌの言葉で「オマンルパロ Omán-ru-paro (奥へ行く・道・の口)」といい,あの世へ行く道の入り口であるということが知られている(知里・山田,1956;西田ほか,2003)。この口碑伝説によれば,おそらく河口から北北東に向かい川筋に沿ってほぼ真直ぐに遡上した津波が,急に河道が東へ向きを変えるこの場所の崖を浸食したということになるだろう。この急に河道が東へ向きを変える部分の河道の標高は,現在の地形図において約4mであり,規模の大きな津波であれば,その可能性は十分にあるかもしれない。また,口碑伝

説にあるように、ここまで津波が遡上したと仮定すれば、下流にあったであろうコタン(集落のこと)を津波が襲ったであろうことは、想像に難くない。

3.4 『津浪除けの呪い その1』

この口碑伝説は犬飼(1943)によって記録された。

「津浪の本體は、この地方のアイヌに従えば心を有する悪い浪で、海の大波(シニンゴロク)に頼んで津浪が押し寄せないようにする呪ひをなすのである。津浪が襲来するかも知れないと云う豫測は、偶然に誰かの夢枕に立つたり、何か異常な自然界の變化が起つたりして、老婆やエカシがツスをなして豫言し、或いはツスやポニタック(後出)を使う豫言者が、言ひ出してコタンが騒ぎ出す。この呪ひは海岸で行はれ、一軒一軒の家から各々破損して使用堪えない古道具とまだ搗いていない稗(ピヤパ)を唐箕(ムイ)の中に入れて砂濱に運び、砂濱の波打際(ペシュンドマリ)に海岸線に平行に高さ半米、長さ二十米餘りの砂の波形を畦の如くに六本作りその間に稗や道具を置く。

この準備が出来たら丘の方から男はエムシを持ち、女はヨモギの枯れた莖を手にしてホーイホーイと悪魔拂い(ロルンベ)の呪ひをしながら着物の裾を腰迄まくり上げて陰部迄露出して波型のところに行き、足を高く上げて砂の波を崩し、稗や小道具を蹴飛ばして海の水の中に蹴込み、シニンゴロクに、吾々は、この様にして津浪がコタンを襲い総ての物を海の中に引き去る代わりに、自分たちの方から先に物を遺すから、コタンまで来る用事はないから、出て来ない様に頼む。(鵜川、邊泥氏及荒井田シュサンクル氏)」

漁労を行うアイヌにとって津波は大きな驚異であったに違いない。とりわけ、浜辺のコタンにおいては、漁労だけでなく、コタンの存亡にかかわるほどの大きな災害である。そのため、“度々津波に襲われるアイヌコタン”において、その自然の驚異を恐れ津浪除けの呪いの祭事を行っていたということは、自然なことであろう。

3.5 『津浪(海嘯)除けの呪ひ その2』

この口碑伝説は犬飼(1943)によって記録された。

「白老方面では、津浪は極めて稀で現在生きているアイヌでこれを経験した者はなく、従って津浪除けの呪をした者はないが、宮本家にウバクシマ(口碑)として残る話では、津浪は津浪の神(悪神)である夫婦の神オレブンベカムイの起こすものでその前兆は、エカシが見れば直ぐ判り、海の水が波もなくどろんとして氣味悪く静かで、岸には小さい波がどぶどぶ躍つてゐる時で、これを見たら直ぐに濱に出て、鵜川の如く古道具を並べて波に攪はせ、オレブンベカムイに與へる。然し、鵜川と異なることはウバクシマに従って、昔オレブンベカムイが海から来た時に、同時にアイヌの神なるシリカップ(カヂキマグロ)が現はれアイヌは

シリカップの導くまゝに流れてみたら樽前山に引掛つて命が助かつたと云う話があるから、この津浪除けの呪の時にエカシは樽前山の山の神にイナウ(筆者注:木幣のこと)を作つて捧げカムイノミして酒を供へる。(白老、宮本氏)」

前項(3.4)述べた鵜川町における津浪除けの呪いの祭儀とほとんど同じ内容である。また、白老町において、昭和6年に行われた津浪除けの祈祷式の様子は、満岡(1924)によってその詳細が記録されている。この祈祷式も犬飼(1943)で記録された津浪除けの呪いと同様に、海岸に祭壇を設け、イナウを並べ祈祷を行い、廃品汚物を悪神に捧げ、満潮の波にさらわれるようにするというものである。

3.6 『登別のアフルパルについて』

この口碑伝説は知里・山田(1956)によって記録された。

「登別駅から幌別本町、室蘭の方向に行く鉄道は駅を出て先ず登別川を渡り、間もなくトンネルを抜けて富浦、幌別本町方面の海浜に出る。此のトンネルが俗に蘭法華の高台とよばれる所で、アイヌ時代の古名はリフルカ Ri-hur-ka(高い・岡・[の]上)である。長い尾根が断崖となって海につき出したいわゆる蘭法華岬(原名 Rampok-etu)の上の所で、海を眺める風景の美しさは、古く東蝦夷日誌や蝦夷行程記などの中でも特記された場所である。

この岡の東尾根の上は「ハシナウシ」Hasinausi(＜hasinaw-us-i 枝幣・群在する・所)と呼ばれていて、知里翁の若い頃は、まだ二ヶ所に幣場があったということであり、この岡が古く海神の祭場であったことを物語っている。この幣場のすぐ上が広場で、おそらくそれが古くはカムイミタル(Kamuy-mintar 神・庭)だったのであろう。この岡の上は昔から神聖視されたところで、そこにはえらい神(黒狐と云われる)がいて、災害の予告をしたり、時化の襲来を告げたりしたという。また、むかし大津波があつて世界じゅうが水の下になったときこの岡の上にお膳の広さだけ水の漬かぬ場所があつて、そのおかげで人間が種ぎれにならずにすんだという云い伝えもある。」

この伝説に登場する蘭法華岬の標高は、海拔61.5mあり、海岸線に面して位置している。実際、津波がこの附近の海岸を襲ったとしてもおそらく波を被ることはなかったであろう。

3.7 『トンケシの津浪』

この口碑伝説は知里・山田(1958)によって記録された。

「幌別の西にトンケシというところがある。ここはその昔、大きな部落があつて六人の首領がすんでいた。

ある時、日高のトヌウオウシという物がここを通りかかった。するとカムイヌプリに通じる道のあるキウシの

上に一匹の兎が立っている。その兎は沖の方へ両手をつき出し、しきりに何かをまねきよせるような身振りをしていた。

トヌウオウシは津浪を呼びおこしているのだと鋭くさとり、トンケシの部落に向かって「津浪が来るぞ、早く逃げろ。」と叫んだ。しかし、六人の首領たちは酒宴を盛大に開いており、この叫びに耳をかそうとはしない。それどころか「へん、津浪なんぞきてみる、こうしてやる、ああしてやる。」といいながら刀を抜いてふりまわしたりもした。

トヌウオウシは呆れはて、いったん虻田の部落めがけて走り去った。そのす早いことは、背中のおが一直線になったまま落ちなかったほどである。かれが有珠の部落についた時、はるかうしろで津浪のまくれ上がる音がした。この津浪のため古いトンケシの部落は亡びてしまったのだという。」

この口碑伝説に出てくる“トンケシ”とは、現在の登別市富岸町のことである。この富岸町は海岸沿いから富岸川沿いに山側へかけての地域をさす。最も海沿いの地域では標高が5~10mほどで海岸線から600mほどであるから、この地域が津波に襲われた可能性はあるだろう。

3.8 『内浦湾沿岸の大海嘯』

この口碑伝説は吉田(1915)によって記録された。

「内浦湾沿岸のアイヌ間にも昔大海嘯のあつたと衆口一致してある。膽姫元室蘭はそのため寶器什物遠く對岸の禮文華エコリの岬に濼ひ附きてエコリの名を留め長万部山(オンシャマンベヌプリ)、昆布岳(コンポヌプリ)は、鯨(シャマンベ)、昆布(コンポ)がその山に打揚げられたからの命名といふ。斯く海岸からかけ離れた山にまで海に因んだ命名を在するのは必ずしも海嘯の結果とのみ解することはできぬがその多くは海嘯に因むようである。」

室蘭の海岸から豊浦町イコリ岬までは内浦湾上を直線距離で約40kmほどである。内浦湾沿岸における津波は1640年の駒ヶ岳の噴火によるものが知られている(Nishimura and Miyaji, 1995)。また、この津波については、和人の記録からも知られている(北海道廳, 1936, 北海道, 1969)。津波によってさらわれた物が、内浦湾を漂い、イコリ岬まで流れ着いたという可能性は否定できない。しかしながら、津波によって、長万部岳や昆布岳に鯨や昆布打ち揚げられたということはないだろう。

3.9 『フレイドヒ』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「フレイドヒは今の郷社千歳神社境内の崖である。昔こゝは山続きであったが、津波のために山が流れた。その切れ目が即ちフレイドヒであって、その当時は赤

土であったが、今は草木が生じて赤土が見えない。フレイドヒとはガケツボ、赤ギレの意味なのである。」

千歳神社の標高は海拔約21mであり、太平洋から直線距離で約20kmある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。また、この千歳神社のフレイドヒは洪水によって流された話というものもある(更科, 1971)。

3.10 『沙流川の津波伝説』

この口碑伝説は更科(1981)によって記録された。

「沙流川中流のオーコッナイと幌毛志との間の川向に、川に向かって突き出た岩はロクンデエト[°]とって、昔、津波のとき、弁財船がここまで押しあげられてひっかかり、それが岩になったのだ。

またモセウという流れの流域にフンベセト[°]ル(鯨の背中)というところもある。これはその時鯨がここまで押しあげられたのだ。(平取町長知内・萱野利吉老伝)」

沙流川中流のロクンデエトの遺跡の標高は海拔約70mであり、太平洋から直線距離で約30kmある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.11 『日高沙流太の大海嘯』

この口碑伝説は吉田(1915)によって記録された。

「昔、松前侯の使臣が日高沙流太に来たとき、平取以南の酋長が集まったときに大海嘯があったと伝えた。また、大海嘯が沙流川遡上して沿岸の多くのアイヌが溺死したのを知らずに、現在の荷負村のペナコリの下にニナツミのチャシにいた老人でさえ溺死した。海水が引いた後には大きな鯨(ニナ)が残されたため、そこを荷菜と言う。」

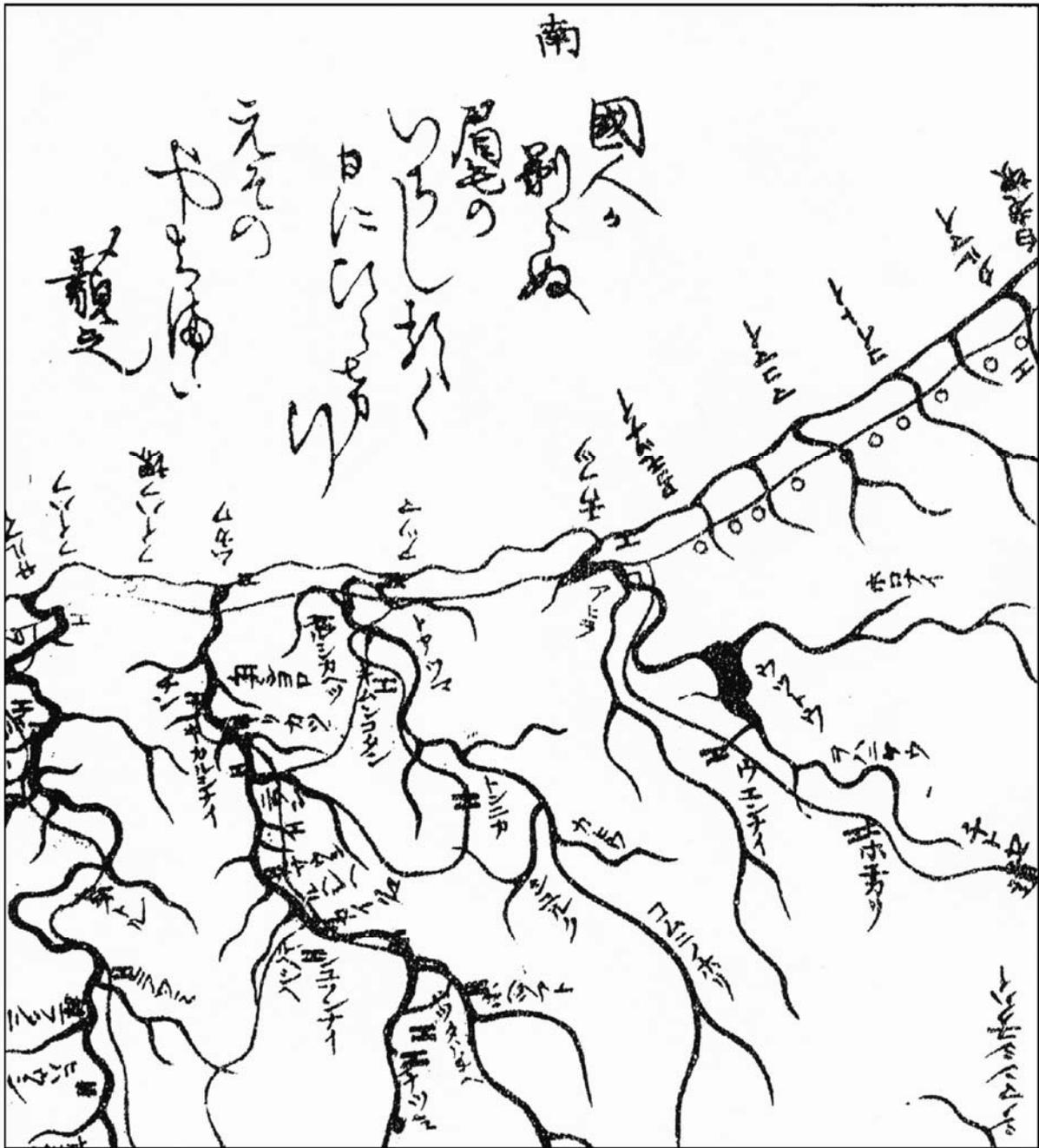
沙流川中流のロクンデエトの遺跡の標高は海拔約60mであり、太平洋から直線距離で約22kmある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.12 『カヒウ』

このアイヌの地名に関する記録は松浦武四郎が文久三年から明治十二年の間(正確な年代は不明とされている)に刊行したとされる『東蝦夷日誌 三編(ベツベツよりユウブツ、サル)』(木版本 多氣志樓蔵版)の中に記録されている。

「ホロナイ過て二股に至る。左りカヒウ(川幅七八間)鴟の事也。鴟は、海辺に住める者なるに、昔し爰に來り、巢を作り雛を持しや、其時海嘯にて海辺皆荒れたりと。依て其鴟は神の御使者なりと、今に其処を尊敬し、必ず此処に來ればエナヲを供えけるとて多く立たり。」

カヒウという地名は現在の地形図にはないが、松浦の記した『東蝦夷日誌 三編』に書かれている地図の中にはカヒウという地名が示されている(第4図)。これ



第4図 松浦武四郎による『東蝦夷日誌 三編』(北海道大学附属図書館所蔵)より胆振海岸の地名。厚真川沿いに「カヒウ」の地名を読み取ることが出来る(地図の中央やや下)。

Fig. 4 The Ancient map of Iwuri coast quoted from “Higashi Ezo Nisshi Vol. 3 (Hokkaido University Library collection)” written by Takeshiro Matsuura. The place-name of “Kahiu” can read in the bottom of the center in this map.

によれば、現在の厚真川沿いの支流であることがわかる。現在は海岸より直線距離で約 20km の地域に、頗美宇(ハピウ)川という支流がある。第 4 図からも松浦の記載したカヒウの地域に近い。おそらく、松浦のカヒウとは現在の頗美宇川の流域のことであろう。この

地域の標高は約 30m あり、仮にアイヌの時代に厚真沿岸を津波が襲ったとしても、この地域まで津波に襲われたということはないだろう。また、更科(1955)は、「カピウ」を平取川上流、更科(1981)では「カピウ」を沙流川上流としているが、これらは松浦の『東蝦夷日

誌三編』の中の地図中の「カヒウ」の場所としては不適當である。

3.13 『死者の国(ボクナ・モシリ)を訪れた酋長の話』

この口碑伝説は久保寺(1972)によって記録された。

「私は勢望の高い大酋長である。交易に出かけた人たちが、うまい儲けをするということを聞くと、それはあまりにも羨ましいので、わしも妻と二人船に乗って、交易に出かけたのだった。(中略)。途中、どうしても泊まらねばならぬ都合で、ある険しい山の手前に、狭い砂浜があったので、そこなら、どうやら、今夜泊まれそうなところなので、船を曳き上げ、流木を拾い集めて、火を焚き、夕食の支度をしながら、ふと沖の方を見ると、もの凄い津波が、今にも此処へ、被さって来る様に、押し寄せて来るではないか。どうしていいか、わからないので、ともかく、砂浜の後の岩山伝いに上へ上へと逃げていくと、土砂崩れのしたところがあったので、妻の手を引いて、そこを通過して、逃げて来ると、行く手に大きな洞穴が見えた。そこを行けば、一番安全のように思えたので、その洞穴から中に入っていった。(中略)。

あそこは、多分すごい化物の住んでいる所に違いない。それで、津波など来もしないのに、来る様に見せたのだよ。あなた方が戻っていけば、載って来た船も、元通り砂浜の上にあるだろう。

(中略)。それ故、この物語を皆にして聞かせたのだ。これからも、交易に出かける人々よ、わたしたちの泊まった、あの砂浜には決して泊まるなよー

とある大酋長が口ぐせの様に、いつも人々に話して聞かせていたが、やがて死んだという。(日高 荷葉 平目カレピア媪伝承 1936年4月24日筆録)」

この口碑伝説は北海道内に多く残る“あの世の入り口”に関する伝説の内の一つであり(知里・山田, 1956), 話の中に登場する津波は、「化物が津波など来もしないのに、来る様に見せた」ものであり、実際の津波とは何ら関係がない。また場所も全く不明である。

3.14 『酒粕を大事にするわけ』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「静内附近では酒をつくと、その粕を大事にしまって置き、何か変事があるたびにそれを撒き散らして守護してもらおう。それは昔、現在の静内町神林附近の家で酒をつかって、あたりの人を皆集めて酒盛りをして大騒ぎをしていたが、朝起きてみるとあたりはすっかり津波にさらわれて荒れているのに、酒をつくった家だけは津波がさけて通っているのに、津波は酒が嫌いということがわかったので、それから酒粕を大事にとっておくのだということである。(新冠町去童・梨本政次郎老伝)」

静内町神森附近の標高は海拔約10~20mであり、太平洋から直線距離で約3kmある。仮に海岸を襲った津波が遡上した場合、この地域は津波の規模により、海水に浸かるか否かの境界付近によるだろう。そのため、この地域を津波が避けて通ったという表現も、一応は成り立つと考えられる。

3.15 『染退地方の大海嘯』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「昔或快く晴れた朝、突然降雨があった。住民は訝しんで掌に受けて、その雨滴を舐めてみた處が、鹹味が強く、さらに染退川の畔に立つて川面を眺めると、寂然として恰も死せるが如くであった。そして魚も鳥も共に姿を消して一向に見えず、住民一同は異様な不気味さと不安とに襲はれた。やがて何気なく遙かの河口を望むと、沖合には黒雲が深く垂れ、浪頭が白く泡立っているのに気付いたので、素破海嘯の襲来と叫んで人々は一斉に避難を急いだ。この時サチウンコタン(現在の字神森川の付近)に住んでゐた古老達は「海嘯の神は、濁酒の粕を殊の外嫌ふから、若し天災の場合には心置くべし」と、先祖から傳られて居たことを想ひ出し、俄に神座を設けて「カムイ祭り」を執行し、メノコ等に部落の周圍に濁酒の粕を撒かせ、心を凝めて神様に祈願した處が、不思議なるかな、染退川下流から襲来した海嘯はこの部落に近づくや、左右に岐れて奥地を激襲し、此の里のみは海嘯の惨禍を免れることが出来た。そして染退川の上流を襲った海嘯は、猛威を振ってメナシベツ川に至つたと傳られて居る。

現在静内市街を距る、東北約七里の染退川支流のメナシベツ川流域には、イタオラキ(海拔七百米)とイツケウナイといふ地名が在して居る。當時の海嘯で千石船がイタオラキの地で難破して、その破片を残し、イツケウナイの山には鯨の腰骨が溜まつたので、それを地名としたといはれて居る。」

この口碑伝説の前半部分は、前項(3.14)で述べた津波から逃れた静内町神林の話と同じである。後半部分のメナシベツ川は、捫別川の支流で、この附近の標高は海拔約25mであり、太平洋から直線距離で約6kmある。この地域が、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.16 『神森(サチウンコタン)』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「昔染退川の沿岸に大海嘯が襲来したが、此の里のみは天帝の恵によつて、浸水の被害がなかつたと云ふ。」

この口碑伝説は、前項(3.14と15)述べた津波から逃れた静内町神森の話と同じである。

3.17 『西川(サメ)』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「昔大海嘯があり、此の里に鮫が漂着した爲につけられた。」

静内町西川の標高は海拔約 55m であり、太平洋から直線距離で約 8km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.18 『三石の津波』

この口碑伝説は更科(1971)によって記録された。

「昔、津波があったとき、三石アイヌはサマンベ山に逃げ、幌毛部落の者はサマッケ山に逃げた。

高いサマッケ山に逃げた幌毛部落の者は、水が三石の連中を呑むのを見て、「あんな低いところさ逃げて、サマンベ(かれい鱈)みたいにバタバタしている」と笑ったので、天上を支流する神はそれをきいて、蒲葦を何枚もしいたような大きな鱈を、水の上に浮き上がらせて三石の人々を助け、波をサマッケ山の方に押しやったので、幌毛部落の連中は見る見る波にさらわれてしまった。

三石川の西の方にあるのが西のサマンベ山、東のが東のサマンベ山といい、徳畑部落の神の型という鯨の形をし山はそのときあがった鯨だ。(三石町幌毛・幌村トシヤク老伝)」

サマンベ山は、現在の社万部山(標高 202.8m)で、サマッケ山とは、三石川を挟んで東の川の標高 150~160m の山のことであろう。どちらの山にしても津波が来てもまず海水を被ることはないだろう。ただし、おそらくコタンのあった河口の低地は、サマンベ山側の方が標高が高い(標高 30~40m の段丘地形)のに対し、サマッケ山側には標高 10m 以下の地域が広く分布している。河口での話に限れば、この口碑伝説もある程度成り立つ。

3.19 『荻伏の津波伝説』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「浦河町姉茶の野深の川べりにある、ポロイワとハライエチキキというところに、昔それぞれの部落があって、或る時、津波がこの地方を襲ったとき、高いポロイワの上にいた人達は安心して、「団子を煮たドロドロした汁をまけたように、ハライエチキキの連中が流れていくわい」と笑って見ていたら、急に津波はその笑っていたポロイワの上の人々をさらって海に流し、ハライエチキキの人達が助かった。そのとき津波であげられた鯨の骨が、今もポロイワにひっかかっているということである。(浦河町姉茶・浦河兼太郎老伝)」

浦河町姉茶の標高は海拔約 20m であり、太平洋から直線距離で約 8km ある。また、浦河町野深の標高は海拔約 30m であり、太平洋から直線距離で約 9km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたというこ

とはないだろう。

3.20 『日高神岳の鯨骨』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「日高幌別川上流の十勝境にある、千四百に余りのカムイヌプリに鯨の骨があるという。それは大昔の津波の時に鯨が押し上げられて、そのまま山にひっかかって海に戻れず死んだ骨であるという。(林佐吉氏輯)」

カムイヌプリの標高は海拔約 70m であり、太平洋から直線距離で約 30km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

日高幌別川上流のカムイヌプリ(神威岳)の標高は海拔約 1603m であり、太平洋から直線距離で約 30km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.21 『十勝鶴抜の伝説』

この口碑伝説は酒井(1907)によって記録された。

「(前略)、其説に曰く、鶴抜の字たる、固より假字にして、原稱はムイ、フンキなり、而してムイとは箕、フンキとは高臺の地、則ち丘陵をいふなり、此丘陵の地たる、其形状半弧形を為し恰も木にて割れる箕に似たり、故に此名あり、傳へいふ、昔サマイクル(辨慶)此地に来るや、當時海嘯の變あり、海水漏満、一望渺茫たり、(後略)。」

鶴抜とは、現在の帯広市川西付近のことである。この地域の標高は海拔約 70~80m であり、太平洋から直線距離で約 40km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.22 『利別川の鯨』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「十勝川第一の支流利別川に、フンベポネオマナイ(鯨の骨のある川)という川があるが、この川はある年の大津波でこの附近の人が皆死んでしまったとき、鯨も津波におされて来て骨だけが残ったところであるという。(音更町・細田カタレ姥伝)」

フンベポネオマナイの場所は、明らかにならなかった。しかしながら、利別川は最も下流の十勝川と合流する地域でさえ、標高が海拔約 10m あり、太平洋から直線距離で約 20km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.23 『虹別の一本木』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「大昔、虹別原野一帯が海であったとき、津波が海岸の部落を襲った。あわてた人々は、そこらの立木に船を繋いでもつなぎ止められなかったが、シュネニウシにあった一本の接骨木に繋いで止めることができ、

ここにのがれた人だけが助かって、部落をつくることのできたので、この土地をシュネニウシ(一本木のあるところ)といって祭事には酒をあげるようになった。(標茶町虹別・前田千太郎老伝)

標茶町虹別の標高は海拔約 200m であり、太平洋から直線距離で約 65km ある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.24 『白糠のアイヌ語地名:キラコタン』

この口碑伝説は白糠町(1954)とシラリカコタン編集委員会(2003)によって記録された。

「キラ・コタン(kira-kotan 逃げる・村)は、津波の襲来でマサルカから村をあげて逃げてきたところからつけられた地名である。

谷口忠氏の私有地約一丁部の土地をキラ・コタンというが、その大半は堤防用地となっており、このキラコタンの中央を道路がとおっている。」

白糠町のキラコタンは、現在の白糠町西一条北6丁目付近のことで、標高は海拔約 4m であり、太平洋から直線距離で約 1.5km ある。また、マサルカとは、白糠町の駅前道りと国道 38 号線の交差点付近で、標高は海拔約 1m であり、太平洋から直線距離で約 250m ある。マサルカを襲った津波のためにコタンをあげてキラコタンに逃げたという可能性はあると考えても良いだろう。ちなみに、鶴居村にもキラコタンという地名があるが、津波との関連は見いだせなかった。

3.25 『コイトイ沼の神岩』

この口碑伝説は佐藤(1968)によって記録された。

「庶路のコイトイ沼は、「ウグイ」、「フナ」などの魚も沢山いたし、周囲の山は「ウバユリ」や「キトビロ」も多かったのも、庶路は住みよい平和なコタンとして、アイヌ仲間でもうらやましがられてた。昔、コタンに非常に上手なツス(占い)をやるお婆さんがあった。どうしたとか、ある晩このお婆さんが急に白髪を振り乱して「オレブンベエク(津波が来る)」とコタンの名かを連呼して走り廻った。コタンの人だちは、「あのツス婆さんは気が狂ったのだろう」、とかえりみななかった。婆さんは「早く逃げないと皆死ぬぞ」と、ますます大声で家々の戸をたたいて廻ったので、皆気味が悪くなり、裏山に逃れた。すると間もなく沖の方が盛り上がり、あれよあれよといううちに、山のような大波が押し寄せてきて、すべてをさらって行った。人々は「お婆さんのおかげで助かった」と喜び合った。しかしお婆さんの姿はそれっきり見たものがなかった。

後でわかったのだが、沼の奥の谷に一つの大岩が立っていた。これは、あのツス婆さんがなったのに違いないと、イナウ(木幣)を上げて、カムイ・イワ(神岩)といって祭った。(庶路・神の沢、芦名ヨシの話、佐藤直太郎聞書)

コイトイ沼は、現在の白糠町のコイトイ川沿いにある。

沼の標高は海拔約 3m であり、太平洋から直線距離で約 1.3km ある。話に出てくるコタンの名前はないが、コイトイ沼の南のコイトイ川沿いの低地は、標高が海拔約 2~3m で、太平洋から直線距離で約 1km 以内にあるので、津波に襲われた可能性はあるだろう。

3.26 『クシロの津波』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

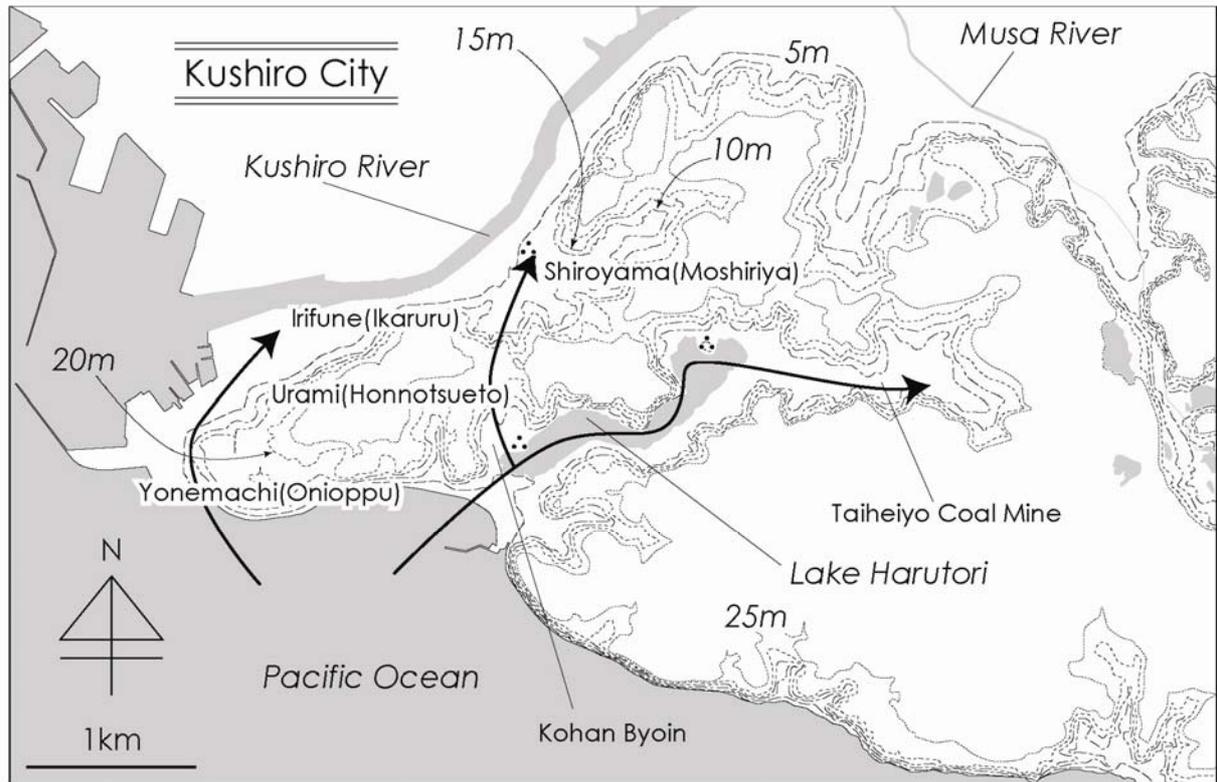
「私(春採部落の古老トシエランクル)の父が若かつた頃、クシロに大津波があつた。コタンの人々が漁のために沖へかけた網が波のために陸へ打ち上げられ、ホンノツエト(今の休み坂附近)の岩かげの中段に引つかかたりした。

かういふ大津波は、むやみにあるものではないが、先祖のいひ傳えによれば、地震が先に来るものだ。大地震があつたら早く高臺に逃げるものだ。高臺に逃げても笹地をえらべ、笹は根深く長く張って、中々地が裂けない。

この時の大津波も大地震がさきに來て、大地が裂けて水が迸り出ると、中からフナのやうな魚がとびだしたが、大事の場合そのフナがどうして出たか、どうなつたかわからない。

津波はハルトリのトウ(沼)を上つて、チャシ(筆者注:アイヌの時代の砦)の右手を北に向つて進み、今の湖畔病院(筆者注:現在は無い)の前からモシリヤに進んだ。またその一つはトイトウ(今の太平洋炭鋳附近)の奥にぶつかり、更にフレムサの小川を越したといふ。もう一つのオニツップから上つた波は、イカルル(今の築港正門前)を越えて、フレナイブトに出たといふ。ボンノテト(休み坂附近の崖)はその際波の打ち付けたところである。」

この口碑伝説は具体的な地名が多く出てくるため、津波の遡上したコースを推定することが出来る(第 5 図)。ホンノツエトは現在の釧路市浦見の辺り、モシリヤは現在の釧路市城山の辺り(モシリヤ砦跡の遺跡がある)、オニオツップは現在の釧路市米町の海岸の辺りである。また、トイトウとイカルルは本文中にあるとおり、それぞれ現在の釧路市武佐と入船あたりである。これらのことを考えると、この口碑伝説に出てくる津波は、春採湖を遡上し、一方はモシリヤへ流れ込み、他方は春採湖奥の武佐の辺りまで襲ったことになる。ただし、春取湖からモシリヤへ抜けるコースだけは途中で海拔約 20 数 m ほどの丘陵を越えなければならない。また、春取湖の西の海岸では、米町の海岸から上陸した津波は北西に遡上し、釧路港へ抜けたと考えられる。津波が襲ったとされるトイトウの標高は海拔約 10m で海岸線から約 3km である。また、オニオツップ、イカルルそしてモシリヤあたりの標高は、それぞれ、海拔約 10m、約 4m そして約 10m ほどである。また、七山ほか(2001)は、春採湖の湖底の堆積物から、過



第 5 図 釧路市におけるアイヌの記録に登場した津波の遡上ルート。海拔 5、10、15、20、そして 25m の等高線を示した。∴: チャン跡。

Fig. 5. Routes (arrows) of tsunami run-up were estimated from the Ainu oral traditions in Kushiro City, Hokkaido, Japan. The contour lines of 5, 10, 15, 20 and 25 meters are shown in this figure. ∴: Remains of the Ainu “Chashi”.

去 9000 年の間に生じた 20 層の津波イベント堆積物を報告している。これらのことから、一部のコースに疑問は残るが、この地域が津波に襲われた可能性はあるといえるだろう。また、津波が来る前に大地震があるという記述は、実際にアイヌの人々が地震津波を経験して知っていた可能性を示している。

3.27 『津波と春採湖』

この口碑伝説は佐藤(1968)によって記録された。

「昔、大地震があったので、アイヌだちは大地震の後には必ず津波があると、エカシの言い伝えがあるから、早く逃げろと行って、皆丘の上に逃げた。間もなく沖の方がもりもり高くなって、大波が押し寄せて春採湖に入ってきた。ちょうどイタンギ(椀)に水を入れたように、見る見る湖は一ぱいになり、一番低いオンネパラツコツからあふれてモシリヤに流れたという。(山本太吉談、佐藤直太郎聞き書)

〈参考〉オンネパラツコツは、オンネ(大きい)、パラ(広い)、コツ(窪み)で、ウイライケチャン(現柏木小学)の東側の北西部星園高校の西側に至るところは、春採湖の周辺の最も低いところで、恰も椀の一部が

欠けたような格好をしていたところである。現在は道路が出来て昔のおもかげはない。

モシリヤは現城山町の旧地名である。」

前項(3. 26)述べた『クシロの津波』とほとんど同じ内容である。ここでも、春取湖からモシリヤへ流れ込んだという記述があった。仮にそうだとすると、海拔約 20 数 m ほどの丘陵を越えなければならない。このことを考えると実際にこのコースを津波が遡上したかどうかは疑問である。しかしながら、前項と本項の 2 つの口碑伝説に同じコースを津波が遡上した記録がみられたということは、津波によって襲われた可能性もあるのかもしれない。

3.28 『痲瘡神カステンデ』

この口碑伝説は吉田(1914)によって記録された。

「カステンデは神人の間に在つてパコロカムイの子、神が人間の胎内を借りて人として生れた一例で、彼が歩む處暗夜も水上に月の浮べる如く、光り輝いた。イクレシエ、カステンデに代つてイクレシエの族某酋長の寶物を得ようとした。某殺されたが、某の族更にカステンデを殺した。カステンデの靈幾度も生れ還つたので、

最後に彼の上下顎を取放ち上顎を木の股枝に立て結び、下顎に石を括り付けて海底に沈めた。爾後生れ出なかつたが、悪霊の祟で釧路厚岸(アツケシ)のアイヌは痘瘡に罹つて死に失せ残つた者は亦海嘯(オレフンベ)の爲に殺された。アイヌの大都會であつたアツケシは死に殆全く衰へた。」

この口碑伝説は、カスンテの呪いによって厚岸を津波が襲つたというものであり、具体的な地名はでてこない。しかしながら、添田ほか(2004)は、厚岸町において、11~17世紀の堆積物中に2層の地震津波の堆積物を認め、さらに史跡国泰寺に保管されている「日鑑記」から過去に津波に襲われた記録を認めた。また、七山ほか(2001)は、これらの堆積物が、1843年の北海道東方沖地震(M8.4)による津波堆積物よりも、広い分布を持つことを示している。この口碑伝説は、その内容は作り話であるが、アイヌの時代に津波に襲われた地域であることは間違いないだろう。

3.29 『チバシリ』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「(前略)。

雨はますます強く浪はますます荒れて来る。それでも二つの丸木船は次第次第に近付いてゆく。ザゝゝゝゝゝド、ドツドツトゝゝゝと物凄い浪の音。

「あッ大變だ!! あんな大きな波が!!」

と誰かが叫ぶとたんに、

「ゴーゴッ」

と言ふ物凄い音がしたかと思うと、天にも届く様に海水が一度に噴き上つた。低地に建つてゐた小屋も押し流されてしまった。勿論二つの丸木船などはどうなつたのか見當もつかない。

「おゝ大變だ!! 海嘯だッ海嘯だッ。舟が見えなくなった。」

「舟どころか、これちゃコタンは全滅だ!!」

と一同蒼くなつた。

「鎮まれ鎮まれ。この上はカムイ様のお力ぢや。祈るよりほかに途はない。」

(中略)。沖合の黒點はまだ波にもまれてゐる。と急に沈んだのか見えなくなつた。

「あゝとうとう沈んでしまつた!!」

と思ふとたん今度は天地もさげん許りの地響と、海が一ぺんに破裂する様な凄まじい大きな物音がした。一同は思はずその場にひれ伏して生きた心地がしなかつた。やがて誰よりも先に眼をあげた豫言者イガシは、突然「おゝ見よ!! 皆のものあのワタラ(岩)を一あれがこのコタンの守り岩となつて呉れるだらう。」一同は驚き立ち上がつて海の方を見ると、不思議なことに今までは全くなかつた岩が川口に一つ、バイラギ濱に二つ、僅かに頭を海の上に出して居る。

此の時不意に一人が

「あゝ水が引いてゆく、引いてゆく。」

と叫んだので、よく見ると地上をうづめてゐた海の水がどンドン沖の方へ引いていく。海水が引くに從つて岩の頭がだんだんと現れて、不思議そうに帽子型の岩になつてゆく。

(中略)。

帽子岩(原名カムイワタラ)二つ岩(トノワタラ)桂ヶ岡(もとチヤシのあつたところ)は、今は網走の名高い名所となつてゐる。

(後略)。

この口碑伝説は、他の口碑伝説に比べて物語性が強い。しかし、津波のすぐ後の大きな地震によって岩が現れたなど、現実的な津波の記述ともとれる下りもある。しかしながら、更科(1971)は『網走の地名伝説』の中で「古い伝えでは、以上の様な簡単なものであつて、一般に伝えられている物語的名伝承はないようである」と述べているので、この物語的な伝承は後に創作されたものであろう。ただし、現在の網走湖とオホーツク海の間低地の標高は海拔約2mであり、仮にこの地域に津波に襲われたとするならば、広い地域が被害にあつた可能性はあるだろう。

3.30 『オプタテシケヌプリ』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「対岸の大きな藻琴山と槍投げをして、みごとに藻琴山を負かしたというオプタテシケヌプリ(槍のそれた山)は、昔オホーツク海から押し寄せてきた大津波が、釧路の国境の山を越し、藻琴山も付近のすべての山もその波をかぶつたのに、このオプタテシケヌプリだけは頂上に波をかぶらなかつた。それでそこへ避難していた附近のアイヌは助かつたので、それ以来非常に尊い山として尊敬され、祭りの時には必ずこの山に酒を上げることになつた。(屈斜路・弟子勘二老伝)」

この話に出てくるオプタテシケヌプリとは、「屈斜路コタンの東の標高500m級の山」(更科, 1982)である。藻琴山にいたっては標高1000mもある。従つて、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。また、北海道内にはこれ以外にも山と山が槍投げを行ったという多くのアイヌ伝説が知られている(更科1971; 土屋, 1975)。これらの伝説の変化形の一つとして考えてよいだろう。

3.31 『函岳の津波』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「中川郡美深町の町境にある函岳は、昔からアイヌの宝物を入れてある函(シュポプ)を積んだような形をしているので、シュポペロシキ(宝函がそこに立っている)と呼んだ山である。昔この附近一帯を大津波が襲つたとき、人々は舟に乗つて逃げたが、どこもここも水ばかりで舟をつけるところがなくて困つた。そのとき僅かにこのシュポペロシキの頂だけが出ていたので、そ

こに避難した人だけが助かったが、その時舟に積んで行った宝物を入れた函だけが、そのまま山の頂に岩となって残ったのである。このあたりの山からホタテやタニシの貝殻が出るのは、その津波のときにあがったのであるという。(名寄市内渚・北風玉ニ老伝)」

函岳は、標高1129mの山である。オホーツク海から直線距離で約28km、日本海から直線距離で約49kmある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.32 『誉平の津波』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「国鉄宗谷本線誉平(現在天塩中川駅)のところに、ペンケヌプリ、パンケヌプリという二つの山があり、この山は昔は一つにつながっていた大きな山であったが、或る時の大津波で真中が切れて海に押し出され、それが利尻島になってしまったという。(名寄市内渚・北風玉ニ老伝)」

ペンケヌプリの標高は約716m、パンケヌプリの標高は約531mある。また、オホーツク海から直線距離で約28km、日本海から直線距離で約49kmある。オホーツク海からは約35kmある。従って、アイヌの時代に津波に襲われたということはないだろう。

3.33 『利尻島漂着伝説(1)』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「昔、利尻富士は札幌の近くの、千歳コタン部落にあったが、ある年の大津波でその山がもぎとられて流されて行き、石狩の長沼町にあるサマッキヌプリ(横になった山)にぶつかって、その山を横むきにねじり倒し、そのまま石狩川に沿って北の方に流れて行って海へ出て、ついに今の利尻島になってしまったという。

長沼町のサマッキヌプリとは現在の馬追山のことであるが、サマッキヌプリとは横になっている山という意味であって、その形がねじれたようになっているのは、利尻富士がぶつかったためであるという。なお利尻富士の切れて行った千歳神社の近くの場所を、フルエトエヒといい、フルは坂、エトエヒは切れるという意味である。(河野広道氏輯)」

この口碑伝説は、津波に関する内容があまりに現実的でない。津波の記録も作り話であろう。

3.34 『利尻島漂着伝説(2)』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「昔、国鉄札沼線の浦臼に津波が寄せて来て、近くのクマネシリという山の一部分が欠けて流され、海にとまったのが利尻島だ。(新十津川町泥川・空知保老伝)」

この口碑伝説は、津波に関する内容があまりに現実的でない。津波の記録も作り話であろう。

3.35 『石狩川の大海嘯』

この口碑伝説は吉田(1915)によって記録された。

「石狩川は今の川口から三十里の上流まで海であったが例の大海嘯以後乾土をなしたのであると幌別(胆振)のイタキという(明治四十年当時八十五歳と称した)老翁が物語った。」

川口から三十里というと、約118km(現在の深川市の周辺くらい)である。また例の大海嘯というのが何を指すのかもまったく分らない。津波に関する内容も現実的でなく、津波の記録も作り話であろう。

3.36 『蠟燭岩』

この口碑伝説は山岸(1936)によって記録された。

「余市の海岸に蠟燭を立てたような岩がある。

この岩はカムイエカシ(神の如き長老)といって男神であった。昔、海藻を採りに来たメノコが、知ってか知らずか尊いこの岩の上に登ったので、見る見るうちに天が真っ暗に曇って海が荒れ出した。びっくりしたメノコはやっと部落まで逃げ帰ったが、その夜から物凄い時化になり、そればかりでなく津波まで起こったので、近くの島泊部落などはほとんど波にさらわれてしまった。

それからというものの海の漁がほとんどなくなり、人々は飢餓にせまられたので、巫女をたのんで神に伺いをたてたところ、女が神の岩をけがしたので、神の怒りにふれたのであるということがわかり、蠟燭岩の近くの滝の潤の山頂に祭壇をつくり、木弊をあげて神々にゆるしの祈りをした。するとその夜、蠟燭岩の東の端の真中あたりに、円盤のような燈火が点った。それは神の怒りがとけたというお告げであろうと皆は喜んだが、それからは又元のように豊漁の地となり、鯨の群来もあるようになったという。」

余市の附近で島泊という場所は地形図からはわからなかった。この地域は岩石海岸地域であり、これらの谷間の河口の低地に集落がある。これらの集落の標高は海拔約10m以下であり、仮に津波に襲われたとすれば、波にさらわれた可能性はあるだろう。

3.37 『積丹半島を繋ぎ止めた蠟燭岩』

この口碑伝説は山岸(1936)によって記録された。

「昔、外国の神様が、積丹半島をもぎ取って山靫に引きつけ自分の領土にしようとし、あるとき大暴風と大津波を巻き起こし、そのさわぎにまぎれて引きちぎろうとして来たので、北海道の神様達は、あらしをおかして大縄で積丹半島を縛り、それを蠟燭岩の根元に結びつけたので、とうとう外国の神様も積丹半島を持って行くことができなかったという。」

この口碑伝説は、津波に関する内容があまりに現実的でない。津波の記録も作り話であろう。

3.38 『焼尻島漂着伝説』

この口碑伝説は更科(1955)によって記録された。

「昔、千歳市の山の中で大陥没が起きて、そのあとに一夜のうちに大きな湖ができた。その時の激動で太平洋に大津波が起き、千歳附近はその津波のために洗いさらわれたが、千歳神社のところにあった山が、津波のために切れて流され海に漂い出て、流れ流れてついに、遠く天塩の海中まで行って止まった。それが今の焼尻島であるという。

この時山の流れて行ったあとが溝になって、江別川が出来たのであると。」

この口碑伝説は、津波に関する内容があまりに現実的でない。津波の記録も作り話であろう。

3.39 『駒ヶ岳に関する伝説』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「駒ヶ岳は一名内浦岳とも称する。寛永十七年大噴火をして近海暴張し出漁中溺死したものが七百余人に及んだと言うことである。

安政三年八月二十六日(午前十一時頃と云う)再度噴火し、降灰四方に飛散し、村民は摺鉢を冠って避難し、幸に厄害を被らなかつたとのことである。」

駒ヶ岳の噴火によって近海膨張し出漁中溺死したものが約 700 名いたという記録である。一般に、津波がやってきた時沖合にいれば安全といわれている。この記録の出漁していた 700 人もの人々は海岸沿いで仕事をしていた人々のことだろうか。また、内浦湾沿岸における駒ヶ岳の噴火による津波の堆積物も既に知られている(Nishimura and Miyaji, 1995)。

3.40 『乙部本村の開祖』

この口碑伝説は北海道廳編(1940)によって記録された。

「慶長の初め頃、上杉家の臣宇田民部なる修行者が、近藤市兵衛、福原利右衛門及び其の第五郎兵衛の三人を従へて、南部地方より渡島の途中、東南の強風に吹流されて今の奥尻島に漂著し、九死に一生を得た。(中略)。以上に関する記録は海嘯や火災の爲に已に消失し、現在では何等参考に供すべきものはなく、唯古老の口傳を記したに過ぎない。

當時上ノ國、泊地方より出漁者があつたものか、或は又アイヌ人のものか不明であるが、姫川に沿うて假小屋があつたと言ふ事を附記して置く。」

この記録に出てくる乙部本村というのは渡島半島日本海側の乙部町のことであり、集落の多い河口には標高が海拔 10m 以下の地域が広がっており、津波に襲われる可能性はあったであろう。また、1741 年(寛保元年)に渡島大島の噴火津波により乙部町の沿岸が津波に襲われたことも知られている(羽鳥, 1984; 西村ほか, 2000, 都司ほか, 2002)。また、この

津波については、和人の記録からも知られている(北海道廳, 1936)。

§ 4. 考察

前章では、北海道における津波に関するアイヌの記録をたどった。これらの記録は 40 編におよんだ。記録の中には場所さえ特定できないものや、あまりに現実的ではないものも多く見られる一方で、具体的な地名や場所を特定できるものや、津波の遡上の詳細な描写や津波を引き起こしたであろう地震に関する記述が見られるものもあった。

その結果、全 40 編の記録の内、過去に津波に襲ったとして話の成り立つ口碑伝説は 20 編あった。津波に襲われたとして話が成り立つかどうかよくわからないものは 1 編あった。また、津波が襲ったとして話が成り立たない口碑伝説や話の内容から全く根拠のないものは 19 編あった(第 1 表)。

これらの結果を元に、第 1 図からは、津波に関するアイヌの記録の残る地域性を読み取ることが出来る。すなわち、アイヌの時代に津波に襲われた可能性のある地域は、太平洋側、とりわけ、釧路海岸と日高～胆振海岸および内浦湾沿岸に多い。これは太平洋プレート沈み込みによって日本海溝や千島プレート境界型地震や太平洋を渡って伝播する遠地津波による津波によるものだろう。日本海側での記録はほとんど見つからなかった(3. 36と3. 40の記録のみ)。日本海側では、しかし、1993 年の北海道南西沖地震による大きな津波の被害や 1940 年の積丹半島沖地震、1983 年の日本海中部地震における津波などが知られている。また、オホーツク海側では、網走での津波伝説(3. 29)だけで、日本海側同様、ほとんど見つからなかった。これらのことは、実際に津波に襲われる周期が長かった可能性や、アイヌの人々(または北方少数民族)に関する記録の少なさによるものかも知れない。とはいえ、北海道における津波に関するアイヌの記録が、具体的な場所や内容を伴い、且つ、これだけ収集できたことは、アイヌの時代に北海道の沿岸(特に太平洋側)がしばしば津波に襲われた可能性を示しているといえるだろう。

§ 5. おわりに

本報告では主に“津波に関するアイヌの口碑伝説”という過去の記録から北海道における津波イベントについて考察した。40編の口碑伝説の内、半数が実際の津波被災体験に基づく可能性あることが確認された。また、それらの地理的分布にも特徴があることが

第1表 津波に関するアイヌの記録のリストと評価。

Table 1 List of the Ainu oral traditions and historical records on the tsunami, and their reliabilities.

(○：標高15m、海岸からの距離5kmまでの地域に津波が襲った可能性あり、△：一部可能性あり、×：可能性なし)

番号	地域	伝説名／口碑名	文献	評価
1	鶴川町	シシヤモカムイノミの儀式	犬飼 (1941)	○
2	鶴川町	鶴川周辺のアイヌ文化 信仰と祭事	更科 (1968)	○
3	鶴川町	鶴川の洞窟	更科 (1955)	○
4	鶴川町	津浪 (海嘯) 除けの呪ひ	犬飼 (1943)	○
5	白老町	津浪 (海嘯) 除けの呪ひ	犬飼 (1943)	○
6	登別町	登別のアフルパル について	知里・山田 (1956)	×
7	登別町	トンケシの津浪	知里・山田 (1979)	○
8	室蘭市、豊浦町、長万部町	内浦湾沿岸の大海嘯	吉田 (1915)	○
9	千歳市	フレイドヒ	北海道廳編 (1940)	×
10	平取町	沙流川の津波伝説	更科 (1981)	×
11	平取町	日高沙流太の大海嘯	吉田 (1915)	×
12	厚真町	平取川の鷗 (沙流川の鷗)	松浦 (1865-1880?)	○
13	不明	死者の国 (ボクナ・モシリ) を訪れた酋長の話	久保寺 (1972)	×
14	静内町神森付近	酒粕を大事にするわけ	更科 (1955)	○
15	静内町神森付近	染退地方の大海嘯	北海道廳編 (1940)	△
16	静内町神森付近	神森 (サチウンコタン)	北海道廳編 (1940)	○
17	静内町西川	西川 (サメ)	北海道廳編 (1940)	×
18	三石町	三石の津波	更科 (1971)	○
19	浦河町姉茶	荻伏の津波伝説	更科 (1955)	×
20	浦河町	日高神岳の鯨骨	更科 (1955)	×
21	帯広市	十勝鶴抜の伝説	酒井 (1907)	×
22	不明	利別川の鯨	更科 (1955)	×
23	標茶町虹別	虹別の一本木	更科 (1955)	×
24	白糠町	白糠のアイヌ語地名：キラコタン	白糠町 (1954)、 シラリカコタン編集委員会 (2003)	○
25	白糠町	コイトイ沼の神岩	佐藤 (1968)	○
26	釧路市春採	クシロの津波	北海道廳編 (1940)	○
27	釧路市春採	津波と春採湖	佐藤 (1968)	○
28	厚岸町	癒癒神カスンデ	吉田 (1915)	○
29	網走市	チバシリ	北海道廳編 (1940)	○
30	網走市	オプタテシケヌブリ	更科 (1955, 1982)	×
31	美深町	函岳の津波	更科 (1955)	×
32	中川町	誉平の津波	更科 (1955)	×
33	千歳市・長沼町・馬追丘陵・利尻富士町・利尻町	利尻島漂着伝説 (1)	更科 (1955)	×
34	浦臼町・利尻富士町・利尻町	利尻島漂着伝説 (2)	更科 (1955)	×
35	不明	石狩川の大海嘯	吉田 (1915)	×
36	余市町	蠟燭岩	山岸 (1936)	○
37	積丹半島	積丹半島を繋ぎ止めた蠟燭岩	山岸 (1936)	×
38	千歳市・羽幌町	焼尻島漂着伝説	更科 (1955)	×
39	七飯町・砂原町・鹿部町・森町	駒ヶ岳に関する伝説	北海道廳編 (1940)	○
40	乙部町	乙部本村の開祖	北海道廳編 (1940)	○

分かってきた。しかしながら、口碑伝説は文字による記録ではないため、どうしてもその正確性に劣る面があることは否めないだろう。とりわけ、今回、検討した話の中には年代に関しての記録はほとんど登場しない。さらにその上、本論の中での津波に襲われた可能性の評価は、いくつもの仮定の上に成り立っている。しかしながら、アイヌの口碑伝説の記録の中にこれだけの津波に関する記録が見つかったことは大変重要なことである。とりわけ、海アイヌ(漁労を主として生活するアイヌ)にとって津波は“オレブンペ”と呼ばれるように、沖合からやってくる神(オレブンペカムイ)として恐れられていたほどよく知られていたものであった。これらことは、過去において津波による被害をアイヌの人々が受けていたであろうことを示している。

最近、北海道内各地の海岸(主に太平洋岸)において、地層の中から歴史時代の津波堆積物が報告されている(Nishimura and Miyaji, 1995; 平川 2000; 七山ほか, 2003)。地層の中からの津波イベントの発見は、本報告におけるアイヌの記録の一部を科学の立場から補強するものといえるだろう。

謝辞

北海道教育庁生涯学習文化課の田才雅彦主査には、『鶴川の洞窟』のアイヌの口碑伝説を最初に教えていただいた。これは本報告書をまとめるきっかけとなった。財団法人北海道埋蔵文化財センター第2調査部の西田茂部長には、鶴川町における埋蔵文化財調査報告書を提供していただくとともに、有益な助

言を頂いた。鶴川町健康いきがい課の辻 博氏と鶴川町ム・ペツ館の押野千恵子氏にはムレトイの丘に関する情報を提供していただいた。鶴川町の吉村冬子氏、北海道立北方民族博物館の笹倉いる美学芸員、北海道立アイヌ民族研究センターの小川正人氏、標茶町郷土館の坪岡始学芸員、釧路アイヌ語の会の松本成美会長、釧路市埋蔵文化財調査センターの松田猛所長にはアイヌ語の地名に関して教えて頂いた。北海道立地質研究所の仁科健二研究職員には現地調査を手伝って頂いた。査読をして頂いた独立行政法人産業技術総合研究所の七山 太博士には、有益な指摘と意見を頂き、本論は著しく改善された。

本報告はこれらの方々のご協力がなければまとまらなかった。この場を借りて、以上の方々のご助言とご教授に深く感謝いたします。

文 献

- 知里真志保・山田秀三, 1956, あの世の入り口. 北方文化研究報告, 11, 1-33.
- 知里真志保・山田秀三, 1958, 幌別町のアイヌ語地名. 噴火湾社, 33 pp. *
- 犬飼哲夫, 1941, シンヤモカムノミ(柳葉魚祭). 北方文化研究報告, no. 5, 89-102.
- 犬飼哲夫, 1941, シンヤモカムイノミ(柳葉魚祭). 北方文化研究報告, 5, 89-102.
- 羽鳥徳太郎, 1984, 北海道渡島沖津波(1741年)の挙動の再検討-1983年日本海中部地震津波との比較-. 地震研究所彙報, 59, 115-125.
- 平川一臣・中村有吾・原口 強, 2003, 北海道十勝沿岸地域における巨大津波と再来間隔-テフラと地形による検討・評価-. 月刊地球号外, no. 22, 154-161.
- 平川一臣・中村有吾・西村裕一, 2005, 北海道太平洋沿岸の完新世巨大津波-2003年十勝沖地震との比較を含めて-. 月刊地球, no. 44, 173-180.
- 北海道廳, 1936, 新撰北海道史史料1. no. 5, 北海道, 1560pp.
- 北海道廳編, 1940, 北海道の口碑傳説. 日本教育出版社. 203pp.
- 北海道, 1969, 新北海道史史料. no. 7, 北海道, 1426pp.
- 犬飼哲夫, 1943, 天災に對するアイヌの態度(呪ひその他). 北方文化研究報告, 7, p89-102.
- 久保寺逸彦, 1972, アイヌの昔話. 三弥井書店, 308 pp.
- 松浦武四郎, 1865-1880?, 東蝦夷日誌三編, 木版本 多氣志樓蔵版, 31 pp. **
- 満岡伸一, 1924, アイヌの足跡. (財)アイヌ民族博物館, p175-180. ***
- 七山 太・牧野彰人・佐竹健治・古川竜太・横山芳春・中川 充, 2001, 釧路市春採湖コア中に認められる, 千島海溝沿岸域における過去 9000年間に生じた 20 層の津波イベント堆積物. 活断層・古地震研究報告, no. 1, 233-249.
- 七山 太・重野聖之・牧野彰人・佐竹健治・古川竜太, 2001, イベント堆積物を用いた千島海溝沿岸域における津波の遡上規模の評価-根室長節湖・床潭沼・馬主来沼, キナシベツ湿原および湧洞沼における研究例-. 活断層・古地震研究報告, no. 1, 251-272.
- 七山 太・重野聖之・三浦健一郎・牧野彰人・古川竜太・佐竹健治・斉藤健一・嵯峨山積・中川 充, 2002, イベント堆積物を用いた千島海溝沿岸域における先史~歴史津波の遡上規模の評価-十勝海岸地域の調査結果と根釧海岸地域との広域比較-. 活断層・古地震研究報告, no. 2, 209-222.
- 七山 太・佐竹健治・下川浩一・古川竜太・重野聖之, 2003, イベント堆積物を用いた千島海溝沿岸域の津波の遡上規模と再来間隔の検討. 活断層・古地震研究調査概要報告, 1-17.
- 西田 茂・鎌田 望・芝田直人・柳瀬由佳, 2003, 鶴川町 宮戸第 4 遺跡-一日高自動車厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-. (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書, 168, 256p.
- Nishimura Y and Miyaji N, 1995, Tsunami Deposits from the 1993 Southwest Hokkaido Earthquake and the 1640 Hokkaido Komagatake Eruption, Northern Japa . PAGEOPH, 144 , 3/4 , 719-733.
- 西村裕一・鈴木正章・宮地直道・吉田真理夫・村田泰輔, 2000, 北海道渡島半島, 熊石町鮎川海岸で発見した歴史津波堆積物. 月刊地球号外, 28, 147-153.
- 嵯峨山積・高清水康博・仁科健二・岡 孝雄, 2003, 北海道鶴川周辺の現世のイベント堆積物中の珪藻遺骸. 北海道立地質研究所報告, no. 71, 59-61.
- 酒井章太郎編, 1907, 十勝史. 374 pp.
- 更科源三, 1955, 北海道伝説集・アイヌ編. 楡書房. 279pp.
- 更科源三, 1968, 鶴川周辺のアイヌ文化. 鶴川町史, p 103-126.
- 更科源三, 1971, アイヌ伝説集. 北書房. 367 pp.
- 更科源三, 1981, アイヌ伝説集. みやま書房. 33 pp.
- 更科源三, 1982, アイヌ語地名解. 更科源三アイヌ関係著作集, 6, みやま書房, 304 pp.
- 佐藤直太郎, 1968, 続・佐藤直太郎強郷土研究論文集. 釧路叢書, no. 9, 釧路市, 290 pp.

- 白糠町, 1954, 白糠町史. 白糠町役場, 375 pp.
- シラリカコタン編集委員会, 2003, シラリカコタン 白糠アイヌコタンの継承. 余市郷土研究会, 46 pp.
- 添田雄二・七山 太・重野聖之・古川竜太・熊崎農夫博・石井正之, 2004, 史跡国泰寺跡および汐見川低地において認定された巨大津波イベント. 地質学論集, no. 258, 63-75.
- 田端 宏・桑原真人・船津 功・関口 明, 200, 北海道の歴史. 山川出版社, 376pp.
- 高清水康博・仁科健二・嵯峨山積・岡 孝雄, 2002, 北海道鶴川町の沖積層中から見つかった海成イベント堆積物について. 日本地質学会第 109 回学術大会講演要旨(新潟), 266.
- 苫小牧民報 (1992):「ムレトイの丘」消えた. 10 月 15 日版, p10.
- 土屋祝朗, 1975, 槍投げアイヌ伝説. 釧路叢書, no. 16, 153-168.
- 都司嘉宣・西畑 剛・佐藤貴史・佐藤一敏, 2003, 寛保元年(1741 年)渡島大島噴火津波による北海道沿岸での浸水高さ. 月刊海洋号外, 28, 15-44.
- 山岸禮三, 1936, 神巖蠟燭岩 : 水郷余市の奇勝. 余市郷土研究会, 46pp.
- 米田優子, 1995, アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点—穀物の起源説話に関する検討を中心に—. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 1, 1-25.
- 吉田 巖, 1914, アイヌの妖怪説話. 人類学雑誌, 29, 267-276.
- 吉田 巖, 1915, アイヌの天地山水説話. 人類学雑誌, 30, 425-431.
- ** 1979 年に噴火湾社から発行された復刻版より引用した.
- ** 文久三年極月下旬の自序あり.
- *** 初版は1924年発行. 本報告では2003年発行の第9版増補より引用した.